

第75号 (50円)

昭和56年 9月25日

内容

内観の諸系譜	1
第114回大学共同セミナー	2
ユングの人間観	4
第2回大学院共同セミナー	5
物心一如	7
法人ニュース	8
寄付金報告	8
中川館長歓迎パーティ	9
事業部だより	10
わたしたちの合宿	11



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉
 東京都八王子市下柚木(〒192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス 企画室

編集人・中川秀哉 発行人・岡山猛
 製作 中央公論事業出版

「人間とは何か」という問いかけが、どのような観点から何を知らなければならないかによって、答え、すなわち人間像は様々に変化してきた。ホモ・サピエンスとかホモ・フールといった定義は、人間の機能や能力に注目したルネッサンス以降の人間観、つまり外向的な観点から生まれたものといつてよいだろう。

縄古代から中世に至る宗教はすべて内面の世界と格闘してきた。人間の内面の世界は神秘主義の世界であり、あらゆる宗教がこれに注目してきた。神秘主義は往々にして呪術や迷信に陥りやすいため合理的なものを見方を身につけた現代人は、神秘主義を何かいい加減なものと思いがちだ。呪術は、「こちらの方角に家を建てると災難がある」というように因果関係でみる思考様式であるが、神秘主義は呪術や迷信のように外界を操ろうとするものではない。両者が混同されるのは、心の中に湧き上がってくる様々なイメージが外界に投影され、外界の変化と心の変化とが因果的に結びつけられてしまふからである。

神秘主義の系譜は、まず古代における神話の世界から始まる。古人にとって神話とは、語り、聞き、演ずるものであり、この世の始まりと終り、宇宙の構造を直接に体験することであった。ユング心理学でこれを内面的なイメージの世界と表現するのは、自分たちの内面のイメージを神話の世界に投影し、そこに内面の世界を発見するという仕組みを持っていたからである。

このような内面の世界と外界との同一化は古代の密儀宗教にみられる共通の特徴である。アテネを中心に信仰されていたエレウシス教を例にとると、デメテルと女神とその娘コレーの神話をもとに様々な行事がとり行われていた。若き乙女コレーが野原で花を摘んでいると突然地面が割れ、地下の国の王ハーデスの家来にさらわれてしまった。ハーデスと結婚したコレーは、ザクロの実を食したため地上に戻れぬ身となった。デメテルは嘆き悲しみ、この世のものはずべて不毛となってしまった。ゼウスが心配してハーデスと交渉した結果、一年の三分の一だけコレーは地上に戻れることにな



内観の諸系譜

神話から

深層心理学まで

東京女子大学教授

林 道 義

であると感じたのであって、現代のわれわれのように観察によって水がなければ生物は生きられない、と感じたからではない。

またプラトンの哲学にも神話的なイメージは随所にみられる。ユングがしばしば引用する例であるが、プラトンは人間のエロースを次のように説明している。人間はもともと男女が一緒にくっついた円形の生物であったが、ある時に男と女とに断ち切られた。男女が求め合うのは、元の円形になりたからである、と。

しかしながら、古代人にとって神話の世界はあくまで外界のことであって、自分たちの内面の世界

あるが、これは個人にアブリオリに存在している心の働きであり、ユングの言う集合的無意識に近い。

M・ウェーバーの用語を用いれば非合理的な要素をもつ宗教は、社会的、歴史的事情で徐々に合理化され、理論的な知性主義の力が働いて全智全能の神が成立する。人間はいかに生きべきかを神の前で問ひ、自己吟味によって内面を検討した。キリスト教神学の完成に力のあったアウグスチヌスは、学問・芸術・宗教の一大中心地であったコンスタンチノープルで放蕩の限りを尽していたが、三〇歳の時にユングの言う「闇の中に光を見る」という体験をする。ユングからキリスト教に改宗する。ユングによればこの光の体験には三つの段階がある。一つは黒化といつて神話の世界でいう夜の航海を意味し、闇の中で様々な苦難に遭遇する状態である。この状態を突破すると光の世界に突然出たような体験をする。これを白化といひ、ユングは純粹な霊の世界と表現している。宗教の最高の体験とは、この浄化された状態ではなく、悪や影の世界が純粹な霊の世界と結合した状態であり、赤化といつて太陽で象徴される。この状態にまで到達した人が空海である。アウグスチヌスの場合には光の世界が強く、白化の状態でストップしてしまったため、この世に悪は存在しない、という神学理論が生まれきた。

ルソーもこの状態でストップした人物である。かれは文明の原理によって人間の中に悪が生まれた

(次ページ4段目へつづく)

第114回大学共同セミナー

主題——無意識からの人間理解

——ユング心理学を中心に——

期日——昭和56年6月19日・21日

△全体講義▽

I 内観の諸系譜——神話から深層心理学まで

東京女子大学教授 林 道義氏

II ユングの人間観

上智大学教授 トマス・インモース氏

△ゲスト講演▽
箱庭療法の実際——内的自然といわれるもの

大正大学講師 三木アヤ氏

△セクシオン演習▽

A パルジファル——騎士の全体性への道

上智大学教授 トマス・インモース氏

B ユングと東洋思想

筑波大学教授 湯浅泰雄氏

C 現代女性とユング心理学

早稲田大学教授 松代洋一氏



盛況のユング・セミナー

D 文学・芸術とユング心理学
東京工業大学教授 野田 俣氏

E 神話とユング心理学
東京女子大学教授 林 道義氏

△参加学生▽104名(内女子49名)

東京女子大(16)、早大(14)、東大(9)、立教大(9)、慶大(5)、筑波大(4)、津田塾大(4)、上智大(3)、千葉大、東京都立大、青学大、ICU、聖心女大、成城大、中大、法政大(各2)、一橋大、東工大、東京農工大、東京外大、埼玉大、山梨大、群馬大、都留文科大、学習院大、共立女大、武蔵大、東洋大、東京経済大、大正大(各1)、その他(10)、合計30校

◇

近年、ユング心理学に対する関心がわが国でも急激に高まり、大学共同セミナーの組上りにせられる日の来ることが待たれていたが、林道義氏が企画・運営をかって出で下さることによって実現の運びとなった。企画が持ち上ったから、約二年の準備期間があったが、ちょうど昨55年には「日本ユング・クラブ」が発足し、指導教授陣にはその主要メンバーが一堂に会したかたちとなり、参加学生は新しい学会の息吹きに直接触れる機会となった。三日間は文字通り熱気に包まれた。

◇

応募者総数は一四〇余名を数え、学生層にあるユング熱の高まりを改めて確認することになったが、確保できる宿泊施設を急ぎよ増やすなどしても、全員の申込みに応えることは出来ず、一年生全員と二年生の一部の参加をお断わりすることによって人数を調整した。また、実社会でカウンセラーに携わっている社会人の問い合せも多く、応募理由を検討して出来る限り要望に応えるとともに、三つの講演を公開した。

◇

プログラムは、まず林氏の全体講義で開始された。参加者はユング前史としての神秘主義の系譜を辿ることができ、人類が内的なものに目を向けてきた歴史を概観するという意味で極めて適切な導入部となったようである(要旨はフロントページに掲載)。

◇

引きつづいて夕食後には、T・インモース氏の全体講義が行われた。日本ユング・クラブの会長で、ユングと同国のスイス人である氏は、ドイツ文学の研究からユングに出会い、それまでの研究方法で解明できなかったもの、または取るに足らないものとして切り捨てられたもののいくつか、ユングの著作を読むうちに明らかにした、と前置きして、学生に語りかけられ、広い視野から捉えられたユング像を提示されて深い感銘を与えた(要旨は4ページに掲載)。

今回のセミナーは今年度第一回に当たるので、この機会をかりて、二日午後には2月に館長に就任されたICU学長・中川秀恭氏の歓迎パーティが催された。梅雨時で雨が心配されたが、幸い薄日も

(前ページよりつづく)
として性善説を唱えた。「告白」の中で「これほど自分が迫害される原因がわからぬ」と書いているが、神の前に自分は義人であって正しく生きてゐるのに、なぜこのような苦難に遭わなければならぬか、と問うたヨブと同様である。アウグスチヌスには「神のみが善である」、ルソーには「人間は善である」という絶対にくつがえすことのできない固い枠があった。しかし、神の原理の中に悪がないのに、どうして人間に悪へ向かう意志があるのか、あるいは、もともと人間の原理の中に悪がないとすれば、文明へ向かう原理もないはずである、というふうになる。ユングは、人間の中には、善にも悪にも向かう心のあることを認めた上で、どのようにこれらに立ち向かうかを考えることが人間の本性に適合した見方である、と考えたのである。

ルソーについて、もう一つ見落としてはならない重要な側面がある。かれが近代思想の先駆者と呼ばれる点である。かれは聖職があるから人間は墮落すると言って、教会も祭司も否定し、聖書やイエスさえも不要とした。ユング心理学の立場から見ると、教会や聖書やイエスはすべてシンボルであり、これらを媒介にしてはじめてわれわれは無意識の世界(「神の世界」と関係をもつことが出来るという傾向があらゆる分野に適用される、近代思想が生まれてきた。近代思想の特徴は、内面の世界から目をそらし、外界へ目を向け

たことだと言われるが、近代の思想家たちは、決してはじめから内面の世界に無関心であったわけではない。「我思う故に我あり」というデカルトの有名な言葉も、自分の心の中の働きを見つめていった結果、発せられたのであり、出発点においては古代人における内観と同じである。デカルトが自分の学問の体系を確立する第一歩と二二歳の時に、かれは三つの夢を一晚のうちに見る。その一つは、歩いているうちに左へ左へと傾き、真直ぐ立っていられない。突風が吹いて、二回、三回とギリギリ舞いをさせられてしまう。次は、雷鳴がどろき部屋の中を火花が走り、恐怖心で目が覚める。三つ目は、二冊の本が置かれていて、よく見ると一冊は辞典で、もう一冊は詩集であった。非常に穏やかな気分が目覚める。デカルトは、左へ左へと傾いてしまふのは悪魔の仕業であり、ここから逃れて正しい道を歩まなければならない、というふうには解釈した。近代思想にとつては、非合理的なイメージは神から来たものか悪魔から来たものかのいずれかである。すなわち非合理的なもののは外界から来たものである、と解釈すると、これは自分の心の中の状態を示しており、ギリギリ舞いをさせられるのは、自我が確立しようともがいて、雷鳴がして火花が走ったという的は、非常に元型的で、ユングによれば神は善と悪との両面性をもつものであるから、これ

のぞくまずまずの天候となり、交友館とその前庭でさわやかなお茶のひとときが繰り広げられた(記事は9ページに別掲)。

最終日には三木アヤ氏のゲスト講演が配された。氏は今回の指導教授の中でただ一人の臨床家である。ユング心理学で「内的自然」といわれるものが、どのようにイメージとして表出されるかを知る心理療法の一つである「箱庭療法」の実験が、約一五〇枚のスクリーンを通して紹介された。ことばで表現することのできない幼児や、絵を描くことのできない人にとっても有効な技法である箱庭療法の様々なケースが角度をかえて、あるいは時間の経過で映し出された。そこに象徴されるものをどのように解釈していくかが具体的に示され、参加者は無意識のもつ力強さに圧倒されたようであった。何よりも人間に寄せる氏の限りない愛情と、それに裏打ちされたイメージ追求にかける情熱が参加者に強烈な印象を与えたように、一「精神に病む人の描く誠実なイメージに比べると、何頃、何気なく使っていることばにどれほどの意味があるのか、情なくどれほどした」とある学生はアンケートに記している。

様々な学問研究に新しい視点を提供しているユング心理学の全体像に触れる機会が、通常の大学にはない。その意味では、今回大学共同セミナーならではの企画であった。同時に社会人の要求にも応えられる企画の方向性をも示唆している。運営委員の林氏は、閉講

に当って、「一言、大満足です」と言われたが、今回の経験の上に立った次のユング・セミナーが早くも待たれるところである。

出会いと出航

慶応義塾大学大学院社会学
研究科修士二年
堀川 淳一

今回は1月の第13回大学共同セミナーに続き、私にとっては二度めの参加である。1月に知り合の誘いによるものであった。私の所属したセクションでは、ユングと『ファウスト』との関係、無意識と芸術との結びつきが明らかにされ、大変有意義なひとときを過ごせた。

ところで大学共同セミナーの心は、ほかでもないこのセクション演習にあるものと思われる。今回のセミナーでは延べにしておよそ六時間がセクション演習に充たされていた。

共同セミナーに招かれる先生方は、みな壮年にある方たちばかりであるが、セクション演習に臨む際には自らも学ぶという姿勢を打ち出されるので、学生も打ち解けて話すことができる。この機会を利用して先生方や他の学生と積極的に話すこと——それによって共同セミナーは極めて充実したものとされるであろうし、それはあすへの創造につながるのである。

は、こうした人々との相互の出会いにあると思う。それゆえ時間の過ぎるのがとても早く感じられる。そして別れるときは少しばかり寂しいのだ。だがうれしいことには、私たちは、名譽館長である飯田宗一郎さんから「二隻の船」を授けられた。ひとつは scholarship であり、もうひとつは friend ship である。それに食堂に掲げられていた Plain living and high thinking というセミナー・ハウスのモットー。これらのことばを胸に、私たちはセミナー・ハウスより出航したのであった。私たちはこれらのことばをいつまでも忘れないであろう。多くの仲間がこの感動を味わってほしいと思う。今、ドビュッシーを聴きながら、くだんの I・T 君のことを想い出す。君は今、何をしているのか。

人間理解—自己洞察の指標

早稲田大学第一文学部
心理学科4年
新飯田 房子

たおやかな6月の雨が、しつとりと、そして、ゆるやかに、多摩の丘を包み込んでいく。数々の傘が、優しく色づいた紫陽花の花弁にふれ、透明感を添えてはこぼれ落ちる。森の緑が、みずみずしく蘇える。「無意識からの人間理解——ユング心理学を中心に——」というテーマのセミナーにとつて、これほど似つかわしい始まりがあるだろうか(ユング心理学において、水と森は共に無意識の象徴とらえることがある。少しばかりの緊張と多くの期待の混在する独特の雰囲気、このセミナーの可能性を、皮膚を通して教えてく

も神秘的な体験の一部である。デカルトは、辞書は学問を表わし、詩集は哲学や知恵を表わすと解釈して、学問の道に進もうと決心するのであるが、ユング心理学からみれば詩集は非合理的なものを表わすものであるから、辞書と詩集とは、合理的な学問と非合理的な知恵との結合した方向をさし示していると考ええる。

また、カントは、若い頃、スウェーデンボルグの話に興味を抱き、心霊現象を研究して論文を書いた。かれにおいては、霊的な世界と経験的な世界とは全く別の原理として捉えられている。心霊現象は非常に敏感な人が特別に感ずるものであって、霊界が人の感覚や心に訴えてくることによつてイメージが生まれるが、そのイメージは歪曲され妄想となつていもので、霊界の姿をそのまま伝えるものではない、と断じてしまう。こうしてカントは、イメージの世界を理性が関与しないものとして祭り上げ、精神の営みの中から排除

れる。飯田名誉館長の、熱意といつくしみに満ちた歓迎の言葉がそれをより確実に印象づける。「人間とは何か」この古くて新しい問いに対して、古来から様々なアプローチが試みられてきた。何故この問いが、時代を問わず繰り返されているのだろうか。それは、人間の自己理解が、常に「生きる」ということと深く関わるからに他ならない。

大学という組織に籍を置き、学生という特権に甘え、それを生かすしきれずに呑みこまれる。自分というものをみつめることを放棄す

してしまったのである。こうした傾向に反旗をひるがえした人物の一人がニーチェである。「神が死んだ」といってニーチェの言葉は、人間を固有のメカニズムから説明するという原理を生み出すことになった。裏を返せば、聖書や神からイメージが出てくることは、心を研究することが神学に従属することを意味し、心霊現象が神や悪魔に由来すると考えることは、人間の心を独自の法則性をもつたものとして捉えることができなくなるからである。かれは、ルサンチマンという概念によつて、過去に強いショックを体験すると心の中に一定の反応パターンが出来上り、同じ状況に人間が再び遭遇すると、それが働き出すことを解明した。

こうしてニーチェによつて無意識の状態が発見され、フロイトやユングへと内観の系譜が引き継がれていくことになるのである。

(第14回大学共同セミナーの全体講義より。
文責・編集者)

時、人間は虚飾のなかに自己を失い、虚無感に押し潰されてしまふ。あるいは、相対的価値基準に自分の存在基盤の全てを投げ出し、質量をもたぬ空蟬と化する。真の問題は、時代にあるのでも、時の体制にあるのでもない。その人自身に存するのである。それ故、この問いは、いつの時代にも人間理解というものは、自己洞察に於いて、有効な指標を与えてくれる。そして、ここに今回のテーマのもつ一つの重要な意味をみるのである。

ユングの人間観

【ゲスト講演要旨】



上智大学東洋宗教研究所長
日本ユング・クラブ会長
トマス・インモース

人間が超自然たる大宇宙の一部として自分の存在を感じていた神話の時代から、長い長い非神話化の過程を経て、西洋人は研ぎすまされた抽象概念で宇宙を知り尽くそうと試みた。自然科学の発展は数人の業績を生み出したが、一方で人間が理性を重んずる余り、他の潜在能力をうもれさせてしまうという大きな代価を払うことになった。一九世紀末になって、人間の奥に隠されていた無意識がフロイトによって発見された。しかし、これも実証主義の科学者であり、非常に厳格な因果律にしばられていた。かれの弟子であったユングは、人間の無意識の中に働いている唯一の力はリビドーであるというフロイトの考えに疑問を抱いた。子供の頃に受けた何らかの性的障害だけでは、分裂病のような複雑な結果は説明できないのではないかと、病者であったかれは、患者に自分の心理的狀態を表現する絵を描かせた。不思議なことに、東洋思想の知識を全く持たない人がマンダラのような絵を描いた。かれはその絵の背後に働くエネルギーを知りたいと考え、西洋や東洋の宗教のシンボル、神話、錬金術、星占いなどのデータを集め、実に10万例の夢を分析した。その際ユングは、あくまで帰納法によって人間の経験を全般的

にとらえる方法をとった。錬金術、占星術、神秘主義の研究を通してユングはそれらの中に共通するイメージやテーマを数多く見出した。さらにリヒャルト・ウィルヘルムの『黄金の華の秘密』を読み、東洋の思想や宗教の中にも、かれの説を支持してくれる部分があることを知ったのである。今、仮にユングが日本を訪ねてきたとしたら、私がかれに見せたいのは鎌倉の銭洗い弁天である。ここにあるもの——洞穴、池、泉、蛇、弁天——これらはすべてユングの解釈による女性、アーキタイプのボルナのである。この例など、かれの見解を裏付ける文化遺産が洋の東西を問わず存在することの有力な証拠といえよう。

ユングはプロテスタントの牧師の息子であったが、修道院でカトリックの祈りの仕方をはじめた知り、儀式・典礼にあずかることの意味を経験した。かれはそこ心の神のアーキタイプを発見した。神が存在するか否か、神とは何かを考察するのが神学であり、哲学である。これらが客観段階に属する学問だとすれば、心理学の領域は主観段階に照応する。かれは心理学者として、心の中に神を経験することについて語る権利があると考えた。フロイトは確かに心理学者であったが、その唱える心理学はpsychology without psyche(心をぬいた心理学)であった。ユングはこれを精神的なものへと方向づけた。しかもかれは完全に因果律を排し、目的的な見方を取り入れた。「自分の中にあるものがどこから来たかを理解するだけでは半分しかわかったことにならない。人生は過去のみから成り立っているのではない」と。

フロイトは自我と意識から個人的無意識へと到達したが、ユングは夢や儀式、宗教、文学などの分析をつづけていくうち、どうしてもそれよりさらに深いところにある普遍的な無意識を仮定せざるを得なくなった。ユングにとって無意識とは、フロイトのいうようなゴミ箱ではなく、驚異、畏敬すべきもの、宝物の宝庫であった。普遍的無意識は人類が受けついできた経験や様々の精神的な行動パターンの堆積しているものであり、それは動物の根底にまで降りていくほど根の深いものと考えられた。ユングはこれを心の普遍的傾向、イメージ、神話をつくる心の要因など、様々のことばを使って説明している。こうした原始的な傾向やイメージはわれわれの夢の中や芸術家のビジョンの中に現われ、儀式や神話に反映されてその存在を示す。つまり形象、または象徴となって、あるいは人格化されて、あるいは行動パターン、そして意識にのぼったとき、はじめてかたちをとる。無意識のアーキタイプとの出会いは人間精神の発展にとって重大な意味を持つ。この

ように無意識と対峙するとき、その人の人生の根底にあるイデオロギの存在の意味、人生の目的が浮かび上ってくる。これまで知らなかった可能性が見えてきて、新たな力が流れ込んでくる。これを利用して、命の中に含まれている可能性を無駄にしようこととなる。例えば『ファウスト 第二部』やヘルダーリンの作品には、プレヒトやシラーなどと比較したいという箇所が多い。それは、これらの作品の世界が普遍的無意識の層に基づいている、という理由による。単に意識だけでは処理できない領域が広がっているのだ。日常生活の夢、芸術作品のアーキタイプのイメージはわれわれに何かを教えようとしている。それらはノイローゼや精神病の患者ばかりでなく、健康な人間にとっても意味を持つ。より成熟した人間になるための、より完全な人間に至るための示唆をそこから受け取ることができるからである。

ユングは「あなたが潜在的にそうであるものになりなさい」と呼びかける。これは人格の統合であり、いわゆる個性化の過程といわれるものである。一回きりの、分割できない全一的存在である個人は、意識的自我においても人格の形成を目指す、個性化の過程は潜在能力をも開発して霊的全一の存在を目指す。それは人間が仮の魂における諸対立を徐々に克服し、明と暗、男性と女性、さらには人間性と神性のと全一であることを経験していくことである。また、ユングのいうこの個性化の過

程は希望の原理に基づいている。誰にでも癒される道、すなわち人格の隠れた能力を顕在化させる道が開かれると考えるユングの人間観は、究極的には世界的領域を超えざるを得ない。ユングは自分の理論がプラトーンと似ていることを早くから意識していた。プラトンのイデアは心理学的元型の哲学的表現だ、といったほどである。個々の元型が無意識において完全な融合状態にあるとするユングの考え方は、絶対的精神においては精神なものそれぞれに区別できない全一の状態にある、とするプラトンの考え方と同じである。さらに、あらゆる霊は一個の集合的霊に止揚される、といったプロティノスを、ユングは自説の証人にひき出した。古代の思弁的な形而上学者と、経験的に研究を進める現代の医者とは、全く異なる立場から、これほど似ている結果に辿りついたことは驚くほかにない。ただ付言すれば、ユングの思想は広汎で、用語一つとっても複雑である。ユングを正しく理解するために、その点にも留意しつつ、かれの著述を学問的に綿密に研究してゆくのが、われわれにとつての責務であろう。

* "I do not believe in God. I know God." B.B.C.インタビューで「あなたは神を信じますか」ときかれて、ユングはこう答えた。ユングは医者として一生涯、人間を助けるために人間の謎を研究し、人間の心の中に神のイメージ、神のアーキタイプを見つけ、神に出会ったのである。

(文責・編集者)

第2回大学院共同セミナー

主題——心とからだ

期日——昭和56年7月3～5日

△全体講義▽

物心一如

東京大学教授 大森莊蔵氏

△講話・セクシオン演習▽

新しい心身医学への道

東京大学医学部附属病院分院

心療内科長 石川 中氏

身の構造

明治大学教授 市川 浩氏

民俗研究における性——その

心身論的基礎——

明治大学教授 千葉徳爾氏

△運営委員▽

筑波大学教授 小田 晋氏

△参加学生▽31名(内女子14名)

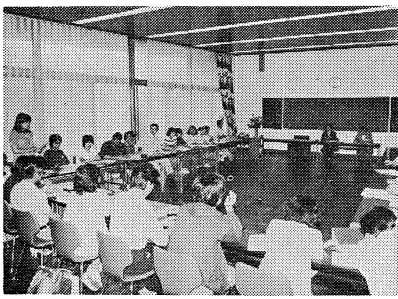
東大(9)、千葉大(4)、慶大、早

大、駒澤大(各2)、筑波大、東京

外大、群馬大、青学大、学習院大、

上智大、聖心女大、東京女大、産

業能率大、津田塾大(各1)、その他(2)、合計15校



最終日のレポート発表(大学院セミナー館)

◇ 第1回のテーマが「諸学の系譜と真理愛」と設定されたのは、いわば大学院共同セミナーの方向性を探る試みとして、学問のありようを問うという問題意識から出されたものであったが、第2回に当たる今回は、自然、人文科学を中心とした今日の文化状況の中で、活発な知的探究の対象となっている心身論を取り上げた。

昭和54年度に新たに発足した大学院共同セミナーは、翌55年度に第2回が予定されていたが、法人運営の態勢不備から企画室の事務遂行に円滑さを欠く結果となり、やむを得ず実施を見送った、という経緯があったが、企画・運営に当たられた小田晋氏の適切で機敏な判断のお蔭で、一年持ち越しのかたちで、原案どおり実現の運びとなった。

◇ 今日、心身論が広汎な学際的研究の場となっている背景には、次のような状況がある。西欧文化の文脈の中から生じたデカルト的な心身二元論にもとづく人間観が袋小路におちり、心身統一としての人間観の再構築が求められるに至ったからであり、知性および合理性を唯一の価値規範とした近代的人間観に対して、とくに肉体の復権ということが、いわれるようになったのも、偶然ではない。

◇ 今回のテーマが「諸学の系譜と真理愛」と設定されたのは、いわば大学院共同セミナーの方向性を探る試みとして、学問のありようを問うという問題意識から出されたものであったが、第2回に当たる今回は、自然、人文科学を中心とした今日の文化状況の中で、活発な知的探究の対象となっている心身論を取り上げた。

今回は、身と心の両面からこの問題に迫るため、哲学・医学・民俗学の三つの領域から、それぞれ近年目ざましい業績をあげておられる方々を指導教授にお招きした。

大森莊蔵氏による全体講義はテーマの持つ広がりとし新しい視点とを示し、セミナー全体に一貫して流れる思考訓練に格好の材料を提示した。氏は、外部世界と内なる心とを対立的に捉えることはごく常識のところの間違っている、として、外部世界がそのまま心である、との考えを提示された。「立ち現われ」、「重ね描き」という概念によって、物理的世界と心的現象とを一元論的に捉えるという基本的枠組の中で、脳的作用をどうみるかが視覚を例にとつて検討され、「科学的思考」に立つた認識論にどっぴりつかつてきた学生たちを根底からゆさぶることになった(要旨は7ページに掲載)。

また、プログラムには三人のセッション指導教授による講話が配され、参加者は他領域における心身論の最先端の知識を得ることができた。とりわけ石川中氏は、心身医学の治療にご自身が開発されたサイバネーション療法をスライドを用いて紹介された。これは患者の自己制御を究極の目的とする治療法であり、セクシオン演習では自律訓練法の実験を体験するという得がたい機会もあった。参加者との質疑応答形式により、身体病と神経症の間に位置づけられる心身症とはどのようなものか、現代社会の問題にそのまますながる心身症の周辺(市民運動としてのサイバネーション療法ということ

を氏は明言されている)、精神療法からみた精神病と心身症との関連や精神医学における身体性の問題が明らかになった。

◇ 今回の大学院共同セミナーとしての工夫が第1回にならって試みられた。一つは、オリエンテーションの際に参加者全員の自己紹介を行ったこと、二つにはレポート提出を課し、最終日に発表の機会を設けたこと、である。どちらも全体が三〇名であるという集団の利点が十分に発揮され、参加者相

感謝と再生
慶応義塾大学文学部四年 副田 素子

頭と身体がばらばらで自分を表現することのへたくそな私が、いつもなら避けて通るはずの(特に大学院共同セミナーなどという気後れする名の付いた)集まりに参加してしまつたのは、考えてみると思ふに不思議な気がする。今だ、単に学問のための学問とか議論のための議論なんていうのだったから、行く気はしない。今在る私の問題、生きて行くうえで切つても切れず付きまといつていく問題、「心とからだ」というテーマだからこそ私の内部欲求が羞恥心に打ち克つて出てきたんだらう。

私の勤は正しかった。私よりもっと確かな言葉を持つてはいるけれど、まぎれもなく同じ問題を抱えた同じまなざしの人たちが、こんなにもいる。学校や職業、年齢も違うのに、相手の話すことが胸にひびく。生と死の現場に立ち合っている人から出された真剣な

互の刺激や啓発の場となった。三日間に繰り広げられた演習や討論は、きわめてレヴェルの高い内容をもっており、大学院共同セミナーならではの感を深くした。因みに学年別、専攻別の構成は次のようであった。三年四名、四年一名、修士一名、博士三名、人文科学系二〇名、自然科学系五名、社会科学系四名、ほかに社会人二名の参加があった。

なお、今年度中にセミナーの内容をまとめた記録書が企画室から編集・発行される予定である。

指摘。そして本でしか知ることのなかつた講師の先生方がこんな身近な存在であったとは。予想以上のいろんな出会いに、私は目を見張つてしまつた。私が抑鬱的に見えていた自分の中の宗教的な傾向も、ここにおいて偏見を拭い去つて見ることができるようになつて見えたのである。突然開けて、私の視野は突然開けて、可能性が見えたのである。そう感じた私は、八王子の山を降りてからしばらく興奮していた。

あれから二ヵ月が経つ。この間、参加した仲間が集まりが二回あった。個人的には、セミナーで知り合った人を通じて同じ問題意識の別の会に参加することができた。今は、体操や演劇から人間を捉えていくこうとしていく動きに心を惹かれていく。興奮は冷めてしまったけれど、何か別の歩みが始まつているのを感じる。私自身は変わらなければ、あの時の感激の記憶は落ちこんだ時に私を励ましてくれるのだ。世界にはまだまだ感激することが残っているのよ、と。

感激と再生
慶応義塾大学文学部四年 副田 素子

大学院共同セミナー

参加者のレポートから

① 東京大学宗教学D1 松本高志

空海の宗教を現代に翻訳しながら、まさにその同じ作業を通して空海の世界に入っていきたいと考へ、そのための糸口を見出したいと願って参加した今回のセミナーだったが、得たものは非常に大きかった。

まず参加したAセクションに関して言えば、心身論における「エネルギー」仮説は必ずしも評判は良くなかったようであるが、便宜上この語を用いるならば、心身症から行動化神経症に至る様々な状態の底流にある解放されることを求めるエネルギー。これは心と身体を一つに貫きながら流れ、溢れるもののように思われる。もしもこれを後天的なものに限定することさえしなければ、空海が「即身成仏」を主張し、成仏への径路の一つとして身体行動を重視した際に直感していたものと非常に似てくるのではないであらうか。

その身体行動の主要なものに印契がある。手指等をもって宗教的象徴を表現するのであるが、市川先生の御説のように、手は直接意志に服従するより近いものであり、身体は物体や空間に対して、素描という緊張した応答をすることがあると理解すれば、宗教的象徴を手指をもってわが身に受け取るとうとするのは非常に理解し易い。ただ、真言密教の場合、ここでは単なる模倣にとどまらず、同

一化してしまおう。この同一化も非常に癒合的であるが、グルーピングという合理的段階を超えて同じ段階にギャップを超えてどび込むという進展は、無秩序な同一化ではなく、公理体系の転換として捉えることのほうが自然である。

密教における「観想」は「想像」以上にリアルであることを要求される。これは外在的実在と同一の——区別はされ得ても、同じ資格を有する——心理的実在に大きな期待がかけられていることを意味する。大森先生の「立ち現われ」のお考えは、私にとってはまさにこの点に関わるもののように思われたし、先生がこれを、実物—人—像の三極構造に対して一極構造であると語られた時に、密教の癒合的同一化が実は区別と秩序をなお存しているということに却って立ち戻ることができた。

② 筑波大学文化人類学M2 嶋島直

私自身が現在いだいでいる関心は、身体観、身体のsymbolism、そしてシャーマン(native healer)等による病氣治療等であるが、石川先生や小田先生のお話は特に興味深くうかがった。身体と精神の二極(どの文化にも当てはまるものではない)の間に身体病・心身症・神経症・精神病というカテゴリが配置される。ここで心身を一つの統合体として捉えた際、疾患がその弱い部分に発現するという考え方は実に興味深い。また、医師である石川・小田両先生が、これらの病氣に科学的なレベルとは別のsuper naturalとも言える側面のあることに言及されたが、未開社会はもちろんのこ

と、今日の日本人でさえ多くの者は病氣のsuper naturalな側面を完全に否定しているわけではない。一人の患者がどうして(どのように)病氣になったのか医学的な説明ができたにせよ、なぜ自分がその病氣の患者として選ばれたのかという疑問は残るだろう。

また、病氣は個人の身体内で意味を持つと同様に患者は彼をとりまく社会の中で病氣というラベルを貼られ病者として社会文化的な意味を持つ。native healerたちは病氣を心身統合体として上位のレベルより、さらに上位のレベルにおいて治療を行なっている。患者の病氣の原因は彼を囲む世界と患者との関係に向けられる。

病因と患者の発病とはメタファ1として捉えられる。こうした視点でのレビュー。患者・家族・親族は示唆に富む。患者・家族・親族・周囲一般、n healerが共通のシンボルを共有しあう社会においては治療のプロセスに象徴的效果が誘導されやすい。最近、某宗教法人の治療儀礼を参与観察によって記述、分析した研究が発表されたが、そこにおいては実際に病氣が治ったと観察されたし、少なくとも当事者たちはそう確信している。私の調査地の下北・佐渡・八丈・沖永良部でも同様なことが見られ、現在、調査・分析を継続中であるが、観察者である私自身、n healerたちの治療効果を否定できない。レビュー・ストロースはn healerを精神分析医と比較し、前者は後者の行う消散を象徴的な次元で行うものと述べているが、卓見であろう。

今後は私の関心を western

medical healerにも拡大して治療における社会文化的要素について考えていきたい。

③ 東京大学社会学M1 大澤直幸

私は、自分が高度に抑圧された人間であることを自覚している。しかし、まさにそれ故にこそ、私はある種の解放を希求している。ところで、解放は、最終的には、人間存在の原点たる身体の水準においてなされることによってしか完成されえないだろう。また、今までの研究を通じて、私は、身体(病)は(社会的)関係性を持つに至った——身体(病)と社会(病)のパラレリズム(例えば、最近の一部の精神医学は、ある種の精神病が、関係性の水準と非常に密接な関係を持っていると示唆を示している)があるように思われる。この点が明確に確認されたならば、私の前記の理論仮説の有効な論拠となるだろう。してみれば、身体の水準での示唆を得ることは、同時に社会解放でもあるはずだ——つまり、自己と社会の相互解放。このような問題意識に立脚して私は今(身体比較社会論)を構想している。

また、身体(あるいは物)と精神を独立した実体とは捉えずに合一態と把握しようとする大森先生や市川先生の考え方は、非常に私にとって示唆的であった。二先生の説に従うならば、身体や物の世界とは独立した精神の聖域が存在するわけではない。このことは、解放の原点を、ある種の心的覚醒の水準に照準させるのではなく、身体(あるいは(身)の世界)に対する具体的な構えの水準に照準させようとする私の基本戦略を、支持しているように思われるのである。

身体(あるいは物)と精神を独立した実体とは捉えずに合一態と把握しようとする大森先生や市川先生の考え方は、非常に私にとって示唆的であった。二先生の説に従うならば、身体や物の世界とは独立した精神の聖域が存在するわけではない。このことは、解放の原点を、ある種の心的覚醒の水準に照準させるのではなく、身体(あるいは(身)の世界)に対する具体的な構えの水準に照準させようとする私の基本戦略を、支持しているように思われるのである。

以上のような原理的な問題に対して、千葉先生の講話と先生を囲んでのセッション演習では、様々な具体的なレビューでの示唆を得ることができた。まず、性現象やその他の身体現象を社会的コンテキストの内に把握しようとする千葉先生の方法には、全面的に賛成である。このような方法に基づいて捉えられた多様な身体現象は、身体経験の可能性に関する我々の想像力を刺激してやまない。例えば、農作物の豊作を祈って性交を擬態する共同態にとって、おそらく大地と人間の身体は、直接的観念連合によって、いわば癒合的に接合されており、大地は自然は、身体を持つ親密性の内に体(次ページ5段目へつづく)

物心一如 【全体講義要旨】



東京大学教授
大森 莊 蔵

物心一如という、たいへん抹香くさい題をつけたが、夏目漱石にもかつて心と身体の問題を論じた短い論文があり、その結論で物心一如、つまり物と心は一体で別々の存在ではないとした。

今日の私の話の目論見を簡単に述べると、現在のわれわれの日常生活の上で、自然科学の基礎常識として通用している、物と心、世界と意識の二元論、とくに大脳生理学の発達と共にますます確証されていくかのごとき二元論が実は根本的な事実誤認ではないか、それを具体的な日常の場から考え検討してみたいということである。

われわれの日常生活の中で心のはたらき、物を見る、物を思い出す、嬉しく、あるいは悲しく感ずる、さまざまに空想する等々のはたらきを検討してみると、それは決してわれわれの意識あるいは大脳の中の、何か特別な舞台の上で、プライベートに行われているのではなく、物理学や化学が扱われる世界と同じ世界の中で行われていること、つまりそれは同じことの二つの描写の仕方の違いにすぎないということを示すべし。

脳のはたらきとして古くから言われるプロジェクトクシオン、いわゆる脳から世界への「投射」ということ、要するに、外からの刺激が脳を興奮させ、それによって知覚

の風景が生じるということ、これを生理学者はいろいろ説明しようとする。脳をつつき、あるいは網膜をつつき、外界の姿は変わるなどと。ただ、これはわれわれの常識、昔から言われている素朴実在論的な見方からすれば誤解不能な点が多い。

われわれの日常の経験からすれば、さまざまな事物は、われわれの知覚以前に、すでにそこに在るわけで、これを最も明瞭に打ち出したのは、通常の解釈に逆らうが、パークレー僧正だった。かれの有名な言葉、「存在するとは知覚されることである」は、われわれの日常生活の上に立てられた常識の描写だと見えていい。われわれはその常識の上に立って昔から生きつづけ、そして自然科学を建設してきたわけだ。

たとえばこの部屋は私の中に、私の脳や意識の中にあるのではなく、私の外にあり、私はその中にいるわけだ。したがって、知覚の場合でも、物と物が映る心というものを分裂させて考えるべき理由は何もないと私は思う。

しかし、知覚はともかく、現在存在しないもの、過ぎ去ったことがらがるの中に浮かんで来、思い出されるのをどう説明するのかという疑問が当然出てくる。

心理学者はこれを記憶の痕跡、あるいは記憶像だと言うが、すでにプラトンやアリストテレスも、これをわれわれの心の中のものに押しつけた印形という比喩をつかって説明している。またアウグスティヌスはこれを記憶の倉庫モデルで、過去の写真みたいなものを心の蔵につめ込まれていると考へた。しかし、そこには明らかにひとつの論理的誤謬がある。

記憶像とはいままでなく、「何ものかの像」である。たとえば、あなた方が数時間前に降り立った八王子駅をいま思い出すとす。その本物の八王子駅がない、八王子駅の像、とは無意味である。だから今思い出しているのはその本物の八王子駅であって、像ではない。これは記憶像に限らず、あらゆるコピー概念について言えることで、これを私は本物のじかの「たちあらわれ」という言葉であらわしたい。思い出すとは過ぎ去った何物かがじかに私にへたちあらわれるのだ。つまり、過去の物理的事物が直接じかに、時空四次元の世界にたちあらわれるのであって、それとは何か別のものがわれわれの心の中に浮遊するのではないことを言いたいわけだ。

つぎに記憶の問題から感情の問題に移りたい。嬉しとか悲しいとかの感情こそは、まさにわれわれ一人一人、他人のうかがい知れないわが心中に持っているのではないかと思われものだが、それも誤解である。

たとえば恐怖の感情を考えてみよう。私は歯医者がかわい。その時の私のこわさは私の心の中にあるのかという問題だ。だが私のこ

わいのはあくまで歯医者であって、私の恐怖から歯医者者を抜き去ってしまおうと、何も残らない。いわば恐怖は歯医者にはり付いているわけで、これをはぎ取ることはできない。素晴らしい絵を見てその美しさに感動する場合も同様だ。強いていえば、こうした感情も決してわれわれの心の中、意識の中にあるのではなく、この世界のあり方、現われ方だといことができるのである。

それでは、われわれの意志というものはどうかの問題が残る。この意志論が実はひどくややこしいものなのだが、結論的に言えば、いま知覚、記憶、感情について検討した結果と同じように、私たちの意志というものが、どこか私の内なる心の中にあって、私の肉体に命じてある行動をとらせているのではなく、ただ生身の私が意図的な行為をしているという端的な事実がそこにあるだけである。その際、大切なことは物理学が描写に用いるヴォキャブラリーとわれわれが日常的に心の描写に用いるヴォキャブラリーの違いである。要するに、われわれは一つの世界を二通りに描写しているということだ。

物と心といわれ、世界と意識といわれるものが、二つの別々のものではなくて、同じ事物、同じ世界に対する二通りの描写法がそこにはあるのだということである。では始めに述べた、脳的作用、例の「投射」をどう見るか。

それにはわれわれの視覚風景が「透視風景」であることに留意する。前景を「透して」中景、遠景

(前ページよりつづく)
験されたに違いない。
あるいはまた、インセスト・タブーのほとんど普遍的な存在は、この種の身体の差異化——同一化可能な身体/同一化不可能な身体——を、人間社会の存立のための基礎的条件として指示しているように思われる。

最後に、以上にも増して私にとって貴重な成果は、先生や参加者の人々との対話、これである。もし、身体解放が相互解放としてしかあり得ないのだとすれば、それは、具体的な生きた言葉の交換、II交感を通してしかありえないだろうから。

が見えている。さらにメガネを透して前景が、眼球を透してメガネが見えている。さらに、脳を透してこれが見えている、といったのである。説明は長くなるので省略する(関心ある方は、『理想』本年九月号の拙稿をご覧ください)。

さて、メガネがくもれば、また水晶体が白内障でくもれば、それから遠の風景もくもる。同様に、脳がくもればそれから先の風景がくもるだろう(正常な脳は、正常な水晶体と同様、透明である。これが「投射」に対する私の解答である)。

この(正常では)透明な脳を含めて事物のたちあらわれ風景、それがともなわず心の風景なのであって、「心に映じた」物の風景なのではない。物のじかのたちあらわれ、それがすなわち心と呼ばれてきたものなのである。
(文責・編集者)

法人ニュース

開館十周年記念募金終結

募金委員会で報告を承認

昭和56年7月8日/経団連会館

開館十周年記念募金の終結報告を議題にした募金委員会が去る7月8日14時、経団連会館で開かれた。出席者は稲山嘉寛委員長以下、花村仁八郎、佐々木邦彦、大槻文平(代理)、櫻田武(代理)らの諸委員。それに法人側より茅誠司理事長、中川秀恭館長、村井資長常務理事、岡山猛専務理事が加わった。

当日欠席の委員三二名中二四名から委任受理の旨、岡山専務理事の報告があり、ただちに開会。茅理事長の挨拶のあと、稲山委員長が議長になり、会議の趣旨を説明、議事に入った。

開館十周年記念募金の経過および終結内容については岡山専務理事から大要つぎのような報告がなされた。

1、昭和51年10月28日の募金委員会結成以来、現在までに一三二団体、七七企業より総額二億四八二万二、〇〇〇円(募金目標額二億〇〇〇円)の寄付金を受領し、これに文部省補助金一、三〇〇万円、日本自転車振興会・日本船舶振興会からの補助金それぞれ四、五三三万円、一、〇四〇万円を加え、合計二億七、三三三万二、〇〇〇円の事業資金(目標額三億〇〇〇円)を得た。

五、二八七万一、〇〇〇円(予算一億三、〇〇〇万円)、交友館に四、〇六七万四、〇〇〇円(予算三、〇〇〇万円)、合計二億四、二九八万五、〇〇〇円の建築費用の支出をみた。

3、以上の結果、未着工の内外人指導教授宿舎建築(予算八、〇〇〇万円)のためには四、九四三万三、〇〇〇円の資金不足を生じ、諸般の事情からこれを今回の募金(事業)計画からはずさざるをえないと判断するに至った。

4、募金終結に際して大蔵省との間に手続き上未処理の問題があり、その解決のため今日まで日時の遷延をみた。

5、上記の事情から生じた残金三、〇五六万七、〇〇〇円の処理については募金委員会の意向を仰いだ上で理事会にはかたいたし。

岡山専務理事による以上の終結報告をめぐり質疑応答のうち、残金三、〇五六万七、〇〇〇円の処理については、これを預り金として一時留保し、近く発足を予定される新募金委員会に一任、そこで未着工建築の実現をふくめての新規事業・資金計画について行われる審議にまづことを承認した。

また、以上の終結報告承認をもつて開館十周年記念募金委員会は任務完了とし、解散したい旨の委員長提案を全員賛成で承認した。議事終了のあと、中川館長、岡山専務理事より法人事業の現状に

ついて説明があり、最後に茅理事長より募金委員会の多年に及ぶご好意とご努力に対する謝意が述べられ、一時間半にわたる会合を閉じ、定刻散会した。

なお、右募金委員会の意向をうけ、7月22日開催の第3回常務理事会において、かねてより懸案の開館十五周年記念募金計画の推進策をめぐり審議の結果、これを開館二十周年記念募金と改称、この際残金処理をもふくめ、運営委員会を中心にさらに検討を深め、理事会において成案審議の上、新募金委員会の結成をめざすよう、今後の大綱方針が決められた。

第47回理事会

昭和56年6月24日 私学会館

役員人事

▼開館十周年記念募金終結報告
▲理事者 飯田宗一郎、村井資長、戸田修三、楠川絢一、中川秀恭、岡山猛

▲監事 平島正喜

委任状による者 理事一四名

理事長が病欠欠席のため理事長に代わり岡山専務理事が議長となり議事に入る。

▼役員人事について

村井常務理事より、沼田稲次郎氏の常務理事辞任の意向を受けて代わって中央大学長戸田修三氏を常務理事に推薦したい旨の茅理事長提案の説明があり、一同の賛成

に戸田氏本人の承諾をもって、この人事を可決承認した。

ひきつづき村井理事より、茅理事長の健康上での理由から理事長職務の補佐役として新たに理事長事務取扱者を選任してはとの提案説明があり、審議の結果、寄付行為上の規定解釈をめぐって疑義も出されたことから、今回は提案を撤回し、なお常務理事会で検討を重ねた上、その結論をもって次回理事会上に臨みたい旨の村井理事の発言を一同了承した。

▼開館十周年記念募金終結報告

終結報告がおこなわれている開館十周年記念募金については、その前提とされた大蔵省との間の事務手続きも終わり、来る7月8日募金委員会の開催、その終結報告を行う旨の説明が議長からなされ、次いで、去る2月3日第44回理事会において原則的承認を得た開館十五周年記念募金計画に関して、新募金委員会において十分審議をつくすことを条件に、その検討、決定を常務理事会に一任されたい旨の村井理事からの提案が可決承認された。

飯田名誉館長に職務委嘱

長らく懸案となっており、去る5月25日の第46回理事会においてその具体化を常務理事会に一任された名誉館長飯田宗一郎氏の処遇について、去る6月5日の本年度第2回常務理事会において審議・承認の上、茅理事長より飯田氏に対して、当ハウス主催諸セミナーの委員会に陪席し、企画・立案についての助言を行うなどの職務委嘱がなされた。

茅誠司理事長談 常務理事会は、運営委員会ならびに大学セミナー・ハウスの現在および将来を真剣に考えていただいている方がこのご意見を汲んで熟慮の末、こういう決定に到達した。幸いに飯田氏も早く委嘱に応じて下さった。われわれは虚心にこの大先輩から学ぶべきことを学ばなければならぬと思う。そして、皆さんのご協力によって、大学セミナー・ハウス本来の理想をさらに高く広かかかけて、その実現に努力していきたい。

●寄付金報告

56年6~7月

△視聴覚施設・設備充実資金
二、五九円

第一一四回大学共同セミナー
参加学生一同殿

八、三六円
第二回大学院共同セミナー
参加者一同殿

一〇、〇〇〇円

五、〇〇〇円
東京大学教授 大森荘蔵殿

▲一般寄付
二、四〇〇円
筑波大学助教授 宮田 登殿

三、〇〇〇円
日本建築学会幹事 木村儀一殿

三、〇〇〇円
芝浦工業大学建築学科 加藤角一殿

▲植樹資金
二、六八〇円
お茶の水女子大学中文学科殿

上智大学法学部松下セミナー殿

昭和56年度

第1回共同セミナー委員会

昭和56年7月9日/私学会館

●新陣容なる

本年度第1回の共同セミナー委員会が去る7月9日18時、私学会館において岡宏子前年度委員長以下一四名の委員と法人側から中川秀恭館長、飯田宗一郎名誉館長、岡山猛専務理事、飯田能子企画室主事他二名出席のもとに開かれた。別掲のとおりの新陣容で発足の本年度委員会の初会合である。中川館長挨拶のあと、新委員の紹介を含めて全員の自己紹介があり、つづいて中川館長の提案、全員の賛成により岡委員長の再選、岡委員長の指名、全員の賛成により野田春彦、山岸健両氏の副委員長再選がそれぞれ決定された。

ついで飯田主事から第14回大学共同セミナーと第2回大学院共同セミナーの実施結果につき報告、共に盛況かつ質が高く、本年度のスタートをかざるにふさわしい成功を喜びたいとの説明があり、後者については小田晋委員からさらしくわしい報告が加えられた。

次に、準備状況の報告として、第115回大学共同セミナー「現代人と『沈黙』」が岡野委員から、第2回大学共同セミナー「現代社会におけるライフ・スタイル」(11月27・29日)が山岸副委員長からなされた。

ついで第116回以後の大学共同セミナーの企画をめぐっての意見交換がなされた。新委員歓迎の食卓を囲んだ夕食会から斬新なアイデ

イが出されたが、これまで懸案となっていたテーマを具体化するごととし、12ページ予告にある第116・117回の大要を決定し、定刻散会した。

〔昭和56年度共同セミナー委員〕

(○印は新任委員)

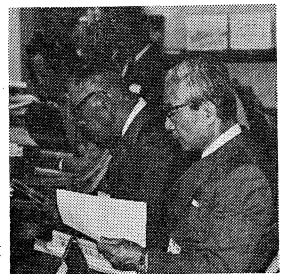
- 聖心女子大学教授 岡 宏子氏
- 東京大学教授 野田春彦氏
- 慶応義塾大学教授 山岸 健氏
- 成蹊大学教授 黒田道雄氏
- 共立女子大学教授 友部 直氏
- 東京大学助教授 板垣雄三氏
- 日本女子大学教授 熊坂敦子氏
- 東京都立大学教授 小池 滋氏
- 国際基督教大学教授 阿久津喜弘氏
- 津田塾大学教授 馬場伸也氏
- 明治大学教授 岡野加穂留氏
- 筑波大学教授 小田 晋氏
- 東京女子大学教授 島美喜子氏
- 千葉大学教授 原田敬一氏
- 立教大学教授 前田 愛氏
- 早稲田大学教授 峰島旭雄氏
- 筑波大学助教授 宮田 登氏
- 一橋大学教授 阿部謙也氏
- 東京大学教授 尾本恵市氏
- 東京外国語大学教授 小浪 充氏
- 法政大学教授 田中義久氏
- 電気通信大学教授 芳野越夫氏

准協力会員校

五大学加入歓迎会

昭和56年6月11日

既報のとおり本年度より発足の准協力会員校制に賛同、さっそく加入された五大学を歓迎する懇談会が去る6月11日10時より、当ハウスで開かれた。五大学から別記の諸氏の臨席のもと、緑に映える交友館での歓迎昼食会をほさんで



歓迎会席上の秋田・細谷両学長(手前より)

構内見学、事業報告、懇談と、初夏の数刻、初会合をたのしんだ。たまたま白梅学園短期大学が新入生オリエンテーションで在泊中であり、ほかにもこの時期には毎年利用の常連校ぞろいというわけ、話はたちまち打ちとけた体験

若い歌声にかこまれて

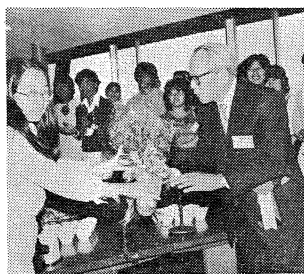
中川館長歓迎パーティー

昭和56年6月22日

去る2月に館長に就任された中川秀恭氏を囲んで、氏の歓迎パーティーが、第14回大学共同セミナーの中日のティールタイム、交友館で催された。主催者は共同セミナー委員会と国際プログラム委員会との両委員長で、この日は同セミナーの指導教授、参加学生たちをはじめ名のなじみの先生方のお顔も見え、和やかな開幕となった。

岡委員長、飯田名誉館長の歓迎の挨拶のあと、花束の贈呈をうけた中川館長はやや紅潮きみの顔をほころばせ、よろこびのことばを。

「もうこうした晴れがましい世界はとくに卒業したつもりでおりましたが、若い皆さんに囲まれ



女子学生から花束の贈呈を受ける中川館長(交友館)

談、実践論に入る。他の施設に求めえない大学セミナー・ハウス独特の雰囲気も共有できることの喜びとともに、短期大学特有の課題が語られ、短大相互の連携、情報交換の場としての当ハウスの積極的はたらきかけが求められる。四年制大学と同様、ゼミやクラブ活動での利用法、共同セミナーや大学教員懇談会への参加の是非など、今後の事業運営のあり方を考える上で重要な問題も提出され、終始自由闊達な雰囲気のうちで談合、またの再会を約しつつ14時すぎ散会した。

〔参加者〕(順不同)

○恵泉女学園短期大学長 秋田 稔

て思いがけぬ幸せです。ほんとうにありがとう

学生たちがおくる即興のコーラス「春」が、ごく自然に団らんの輪をつくり、館長をとり囲んでゆつくりとふくれ高まっていた。ティールタイムパーティー散会のこと、席を遠来荘に移し、遠く旅先から馳せ参じての山内恭彦氏をお迎えして、暮れゆく静寂の中、談笑つきずの感があった。中川館長をお送りし、散会をみたのは二〇時ほどに近かった。

●寄贈図書

56年6〜7月

- 「マネジメント年報」79・80・81
- 「経済学と経済問題」(上・下)
- 「NM法のすべて」
- 産業能率大学教務部学生課贈
- 「女性の心の謎」「自己への道」
- 三木アヤ殿
- 「ユングとヨーロッパ精神」
- 湯浅泰雄殿
- 「会報」92 国立大学協会贈
- 「成瀬仁蔵著作集」第3巻
- 日本女子大学贈
- 「エディプスのいない家」「狂気の構造」
- 小田 晋殿
- 「国際交流」28 国際交流基金贈
- 「政治経済史学」177・181
- 日本政治経済研究所贈
- 「早稲田フォーラム」32・33合併号
- 早稲田大学総長室広報課贈
- 「アジアの友」192・193
- アジア学生文化協会贈
- 「金融経済」188 金融経済研究所贈
- 「研究所紀要」12
- 早稲田大学システム科学研究所贈
- 「エナジー」18
- エッソ・スタンダード石油㈱贈

氏、総務課長島名正英氏○実践女子短期大学学生生活係長宮原幹二氏○産業能率短期大学教務部次長松元淳氏、学生課長鎌田芳孝氏、学生教育研究室小山久雄氏○白梅学園短期大学理事長代行鈴木三男吉氏、学長細谷俊夫氏、学監田中未米氏、教務学生部長北都子氏、保育科長黒田瑛氏○文京女子短期大学教務課長野口昭吾氏

事業部だより

56年6・7月 初夏のキャンパスから

●6・7両月の合宿概況

新学年も6月に入ると、各大学では授業もその他の学内活動もい

一方7月は、今年も同月中旬、お茶の水女子大の新入生セミナー

えると、この率は更に上回る。

●「新入生合宿」終わる

前号で紹介した「一〇年ぶり復活」の津田塾大全学科フレッシュ

多数宿泊して、家族的合宿を展開した。参加者は延べにして七六六

6・7両月中に実施された大学関係の新入生合宿でクラス単位以上

リエンテーションの実施状況をご覧いただきたい。

●大学間交流・国際交流の集い

この6・7両月には、「大学の枠」、「国籍の別」を超えた集いの

の九大に、そして今年には早稲田を加えて一〇大学(いずれも当ハ

米経済社会問題共同セミナー(明治学院大と姉妹校米國ミシガン州

スト教青年交換)委員会主催の身障者を交えた合宿、青山学院大ア

4月10日(土)夕食時の交歓会(五グループ二〇三名)で、初利用の

4月13日(土)新入生合宿で二泊の東海大医学部の教職員・学生計一

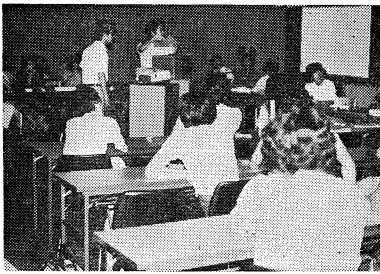
7月14日(土)国際交流基金主催の海外日本語講師研修会(11グループ)の参加

昭和56年6・7月 新入生オリエンテーション実施状況

Table with 4 columns: School Name, Number of Participants, School Name, Number of Participants. It lists various universities and their participation in orientation programs for June and July 1981.

(注) 参加者数の()内は内数で教師。*は2泊、他は1泊。4・5月実施状況は本紙前号(74号)に掲載。

「海外日本語講師研修会」の参加時に三ヶ国計六九名を迎え、夕食時に在泊の七グループ一五〇名が



研究発表——スライドを使用して——芝浦工大八王子合宿

◆わたしたちの合宿◆

生まれる // 連帯 //

建築学科・八王子ゼミ

芝浦工業大学助教

三井所清典

芝浦工業大学建築学科では、夏休みに入るとす2年生の希望者六〇人くらい(学生の約半数)と教室の教師全員が参加する二泊三日のゼミを行っており、今年で六回目になりました。この企画のねらいは、大学生活における学生相互の交流、学生と教師との親交を深めることです。私たちがこのような合宿をはじめた動機を中心に八王子ゼミをご紹介します。

芝浦工大は不幸にもキャンパスが二つに分れ、入学間もない一、二年生は大宮校舎に、三、四年生は山手線田町駅近くの芝浦校舎に通います。そして大宮校舎では一般教育科目中心の教育、芝浦校舎では専門教育科目中心の教育が行われています。大宮キャンパスで

は学生たちの学習にもう一つ活き活きした様子が見えませんが、工科系単科大学に入学し、建築の専門分野の教育を受けようと勢い込んでいる学生にとって一般教育科目がほとんどの授業は、その意義を理解する前に、授業に対する興味をなくすことになるようです。建築学科では、専門教育科目を二年生の授業に割り込ませる努力や、入学時一回で終わっていた専門教育のオリエンテーションを一年前期に毎週一回ずつ「プレゼミ」と称して開いたりして専門教育との接触を図る努力をしていました。一方教師側では、大学改革の時期を経た後、学生との対応に際し、なにかと学生の主体性を期待しすぎていることに気が付き、新しい対応を模索している時期でもありました。そういう時、私は、今から七年前になるのですが、大学セミナー・ハウス主催の大学共同セミナーの企画と運営に参加する機会がありました。二泊三日の短期ですが、寝食を共にしながら他人の話に耳を傾け、考え、自分の考えを発表する体験は人の心をひらかせるものであることを知りました。

スケジュールの進行とともに学生同士や講師たちとの付き合いが日に増えて深化し、初めて出会った学生や講師の間に大きな絆が出来たような思いでした。その時、これが同じ大学の同じ学科の学生と教師の間でなら、そこに生れる一種の連帯は一層大きくかつ持続する可能性の高いものとなるのでは...と思ったのでした。幸い建築学科に共同セミナーの講師の体験者もいて、合宿ゼミの意義が認められ、教官として独自の企画をたてることになりました。企画の主体は教室がもち、運営は教師と学生が共同で行うことをテーマとすること。建築や環境を考える糸口となることとするが、あくまで学生間及び学生と教師間のコミュニケーションを深めること、教師は教授から助手まで全員参加すること、対象を二年生とすること、などが決まり、具体化は担当者を六人程選出して検討することになりました。

最近、担当者は持回りで、半年の準備期間をとっています。前半の三ヶ月は教室側でテーマや運営の方針を検討し、決定します。4月になって、すぐ二年生に企画を発表し、参加者を募り、一〇〜一五人ずつのグループに分けます。学生たちはグループ単位で合宿にむかって課外の準備活動を行います。準備はテーマに従って指定された建物や施設を通りや地域に全員が行って空間体験をし、空間について、いろいろの角度から語り合うのです。話が宙に飛ばないようスライドやスケッチを準備します。むずかしい分析や研究の必要はありません。同じ大学の同じクラスの学生ですから、このような準備活動ができ、これが大学共同ゼミナーにはできない利点です。いわば、ゼミは準備段階からすでに始まっており、合宿はその頂点ということになります。結果として学生は建築を見、環境を考える新しい視座を感じ、新しい言葉をいくつか憶えることになりました。9月のキャンパスで学生たちと再会したとき、それま

◆千人会

昭和56年6~7月

◇現在会員は一六四六名です
大学人Ⅱ一三三四名
社会人Ⅱ 四二二名
◇新しく会員となられた方
一名〔第59回報告〕
B お茶の水女子大学助教 島田 淳子殿

◇会費ありがとうございます
柴垣和三雄、天城勲、安藤利亮、長谷川幸男、芳賀徹、荒川有史、澤島侑子、古畑和孝、村田喜代治、板倉譲治、徳永勇雄、佐藤進、宮崎照子、鈴木二郎、大野佐喜子、道喜美代、川添奈津子、徳永愛子、中山光雄、芳野赴夫、松崎奈岐、石井修二、松野源吾、和田英一、竹内喜夫、長岩寛、朝野洋一、安宅光雄、下出積典、荒井基、田中未来、石井素介、小倉充夫、望月継治、谷清、市川慎一、大内力、阿久津喜弘、藤野登、黒田成俊、細谷千博、見田宗介、星野達雄、北野美枝子、越智昇、野沢浩、松井共子、柴田暉二、立入広太郎、西川治、西宮輝明、吉田幸弘、市井三郎、岡田正弘、板原敏房、川田侃、金子晃、秀村欣二、名東孝二、福田雄、上野芳夫、太田秀通、鶴見和子、福田一郎、林泰造、長清子、長澤孝廣、栗林恒雄、奥村敏恵、中村幸安、大野泰雄、坂野正高、伏見康治、百瀬宏、中野三子、日井久和、笹森健、今堀和友、倉沢進、鳥海俊宏、野田一夫、吉利喜美、高橋勇悦、篠原泰三、石川信男、飯田修、上田初子、詫摩武俊、嶺哲之助、高橋忠次郎、石川孝夫、西嶋定生、黒田道雄、浅川淳、柴田政利、伊藤学、林俊一、鈴木務、辻達也、朱牟田夏雄、阿部齊、佐伯彰一、村上直、犬塚博、中村哲哉、内山尚三、三和治、山西貞、石井進、児玉昭太郎、柏木恵子、吉松藤子、福田敏一、大畑篤四郎、江沢洋、和田義信、川島順平、田島恵児、川田雄一、島田淳子、松島恵、坂田道太、磯部力、三橋文雄、小池滋、矢部章彦、岡沢憲美、高橋公雄、二上貴夫、柴田誠、栗原尚子、中川一郎、松尾浩也、坂本清、佐藤誠三郎、藤平重雄、中村進、朝日信夫、石田雄、中村浩三、山井湧、角瀬保雄、石川馨、山口重克、山本襄治、片岡清子、橋本智、谷下市松、山本幹夫、三輪公忠、望月昭一、築田長世、綿引二郎、土田美芳、小西悟、原口隆英、島岡安雄、鈴木成文、色川大志、長尾龍一、平出彦仁、望月一憲、太田善隆、梅沢豊、吉田望穂子、川原啓美、松原治郎、小池生夫、中山昌



在泊の学生たちで賑わう月例茶道教室(遠来荘)

●利用状況

* 11月2日利用
* 11月3日利用

6月

(76グループ、延三、六〇四人)

- 東京外国語大講師 伊豫谷登士翁
- 東京都立大学臨床心理学実習
- 東京都立大学法学部新入生オリエンテーション
- 東京家政大学教授 宮崎 照子
- 学習院大シニエクスピア劇研究会
- 中央大学助教授 大須 真治
- 成蹊大学教授 佐々木克巳
- 津田塾大学英文学科フレッシュマ
- ン・キャン
- 東京学芸大数学科新入生合宿研修
- 中央大学助教授 高田太久吉
- 明治学院大学教授 竹内 真一
- 駒沢大学助教授 谷敷 正光
- 早稲田大学教授 西宮 輝明
- 明治学院大学日米経済社会問題共

予 告

▼第116回大学共同セミナー

— 故吉阪隆正先生追悼記念 —
 主題 生活(くらし)と私たち
 期日 昭和56年12月11~13日
 ▲全体講義

建築家 菊竹清訓氏
 ▲追悼記念講演
 グラフィック・デザイナー 勝見 勝氏

▲セクション演習
 A生活科学(佐々木嘉彦氏) / B生活(くらし)の原点(石毛直道氏) / C民具に学ぶ(田村善四郎氏) / かつちを創る(松崎義徳氏) / 運営委員
 山岸健、宮田登、戸沼幸市の諸氏

- | | | | | | |
|-----------------|----------------------|-----------------|-------|-----------------|-------|
| 同セミナー | 岡 孝 | 東京大学助教授 | 村上陽一郎 | 新入生合宿研修 | 野崎 喜嗣 |
| 法政大学助教授 | 武蔵工業大学電気工学科新入生歓迎セミナー | 中央大学助教授 | 丸尾 直美 | 東京都立大学講師 | 彦田 新一 |
| 中央大学助教授 | 丸尾 直美 | 東京大学助手 | 橋本 迪生 | 東京都立大学都市計画研究室 | 川上 則道 |
| 成蹊大学教授 | 朝倉 孝吉 | 明治大学教授 | 松瀬 貞規 | 芝浦工業大学教授 | 十代田知三 |
| 明治大学教授 | 桐敷真次郎 | 東京都立大学教授 | 水野 宏道 | 一橋大学教授 | 竹内 啓一 |
| 工学院大学助教授 | 横田 英嗣 | 東京学芸大哲学科新入生合宿研修 | 横田 英嗣 | 武蔵大学教授* | 都留 春夫 |
| 東海大学助教授 | 神山 安雄 | 中央大学講師 | 沖塩庄一郎 | 国際基督教大学教授 | 小田 博 |
| 中央大学講師 | 山田 泰司 | 法政大学講師 | 大槻 健 | 東京大学助教授 | 堀野 定雄 |
| 法政大学講師 | 大槻 健 | 東京理科大学教授 | 樋口 一辰 | 神奈川大学助教授 | 西野 治 |
| 東京理科大学教授 | 藤原 喜悦 | 東京学芸大哲学科新入生合宿研修 | 藤原 喜悦 | 一橋大学関係セミナー | 堀野 定雄 |
| 東京学芸大哲学科新入生合宿研修 | 羽鳥 茂 | 中央大学経済学会 | 加藤 信朗 | 早稲田大学助教授 | 見田 宗介 |
| 中央大学経済学会 | 水野 節夫 | 早稲田大学教授 | 村越 邦男 | 法政大学助教授** | 加藤 豊 |
| 早稲田大学教授 | 加藤 信朗 | 東京工業大学助教授 | 大槻 健 | 早稲田大学助教授 | 川原 榮峰 |
| 東京工業大学助教授 | 水野 節夫 | 東京学芸大助教授 | 樋口 一辰 | 大妻女子大英文学科英語特殊演習 | 三橋 文明 |
| 東京学芸大助教授 | 村越 邦男 | 駒沢大学講師 | 藤原 喜悦 | 東京農業大学助教授 | 佐々木 豊 |
| 駒沢大学講師 | 加藤 信朗 | 駒沢大学助教授 | 喜悦 茂 | 中央大学助教授 | 佐竹 義昌 |
| 東京都立大学助教授 | 水野 節夫 | 法政大学助教授 | 信朗 茂 | 中央大学助教授 | 高柳 先男 |
| 法政大学助教授 | 村越 邦男 | 中央大学助教授 | 信朗 茂 | 東京学芸大助教授 | 島崎 晴哉 |
| 中央大学助教授 | 村越 邦男 | 中央大学助教授 | 信朗 茂 | 慶応義塾大学助教授 | 上野 和彦 |

7月

(100グループ、延五、二五三人)
 駒沢大学助教授 谷敷 正光
 東京学芸大特殊教育学科新入生合宿研修

東京都立大学助教授 馬場 宜良
 学習院大学助教授 大川 章哉
 東京女子大学助教授 福田 一郎
 明治学院大学助教授 小野 哲郎
 国際基督教大学講師 馬場 伸也
 成蹊大学助教授 下斗米伸夫
 武蔵大学助教授 村田 晴夫
 東京都立大学助教授 児玉昭太郎
 東京都立大学助教授 田辺 良美
 お茶の水女子大新入生セミナー*
 中央大学助教授 加藤 俊雄
 神奈川大学助教授 堀部 政一
 一橋大学助教授 堀部 政一
 明治大学助教授 磯田 進
 芝浦工業大学建築ゼミナール
 横浜国立大学教育学部心理学教室

新入生合宿研修
 野崎 喜嗣
 武蔵工業大学講師
 東京都立大学都市計画研究室
 芝浦工業大学教授
 十代田知三
 一橋大学教授
 竹内 啓一
 武蔵大学教授*
 都留 春夫
 国際基督教大学教授
 小田 博
 東京大学助教授
 堀野 定雄
 神奈川大学助教授
 一橋大学関係セミナー
 早稲田大学助教授
 法政大学助教授**
 早稲田大学助教授
 中央大学助教授
 大妻女子大英文学科英語特殊演習
 東京農業大学助教授
 中央大学助教授
 佐々木 豊
 中央大学助教授
 佐竹 義昌
 中央大学助教授
 高柳 先男
 東京学芸大助教授
 島崎 晴哉
 慶応義塾大学助教授
 上野 和彦
 慶応義塾大学助教授
 高梨 和紘
 学習院大学助教授
 岡本 哲治
 駒沢大学助教授
 石井 修二
 上智大学助教授
 長島 正
 早稲田大学講師
 深沢 実
 法政大学講師
 吉川 吉衛
 東京都立大学助教授
 小林 靖二
 慶応義塾大学助教授
 十時 厳周
 東京工業大学助教授
 吉田 夏彦
 東京農業大学助教授
 西郷 光彦
 上智大学助教授
 松下 満雄
 青山学院大学アイセック
 丸尾 直美
 中央大学助教授
 寺中 良二
 早稲田大学瑠稲会
 駒沢大学助教授
 中央大学通信教育部
 中央大学通信教育部
 明星大学通信教育部
 大月短期大学助教授
 国際商科大学講師*
 立正大学助教授
 厚東 偉介

●編集後記

本号は、二つの共同セミナーを特集した。一つは大学共同セミナーであり、一つは大学院共同セミナーである。そのどちらにも、合理主義の代名詞である因果律にとらわれることなく、現われたもの、あるがままを受けとめるという姿勢に立った学問の流れを確実に感じさせるものであった。このテーマに取り組んでいる学生たちの極めて鋭い感覚が印象的であったが、考えてみれば、自由な発想を可能とする試みこそ、大学セミナー・ハウスの本領である。指導に当たられた先生方と、それに呼応した学生たちから発せられた熱気を、紙面から感じとっていたければ幸いである。(能)

中小企業大学校講師 杉澤 新一
 玉川大学助教授 彦田 新一
 都留文科大助教授 川上 則道
 独協大学助教授 林 俊一
 国際商科大学助教授 小峰 登
 高千穂商科大学講師 藤井 耐
 日本女子大学附属高校 I C Y E 委員会
 学生年輪の会夏の集い
 第2回大学院共同セミナー
 ケルゼン研究会
 国際交流基金(海外日本語講師研修会)
 日本キリスト合同教会品川教会
 文学教育研究者集団